令和の御代の天皇と日本人

「象徴」に接し日本を実感

◆◆◆

薗田　稔　秩父神社宮司・京都大学名誉教授

◆◆◆

平成から令和への御代がわりと、それに際しての上皇陛下、天皇陛下のお言葉は多くの日本人に好感をもって受け止められ、日本人としてのアイデンティティーを高めた。民俗学にも詳しい薗田稔秩父神社宮司に、歴史的かつグローバルな視点から令和の時代と天皇について伺った。（多田則明）

令和の時代とは

――元号「令和」の感想は。

予想は外れました。特に「令」という字を付けたのは今までにないことです。万葉集に基づいているので、それなりの意味はありますが、要は漢字で、万葉集の序文も漢文ですから、和漢両用の言葉といえます。万葉の時代までさかのぼっての元号には驚きましたが、今、国際的にはグローバリゼーションの中で厳しい時代なので、ここで日本本来の文化に立ち戻ることには、大きな意味があると思います。言葉としても発音は爽やかで、次第に使い慣れてくれば、親しまれる元号になると思います。私の考えでは、西暦は文明ですが、元号は文化です。

――出典となった『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首」の序文として書かれた漢文は、天平2年（730）正月（旧暦）13日、九州・大宰府の長官、大伴旅人の屋敷で梅の花を愛でる宴会が開かれた際の様子を描いたものです。

「春の非常によい月になった。空気がよく、風が和らいでいる」という意味の部分から「令和」が採用されたわけです。「風が和らいでいる」のは春が訪れたからだけではなく、663年の白村江の敗戦による国家存亡の危機をようやく脱したことが背景にあります。それまで、国土防衛のため、遠くは東国からも多くの若者が防人として九州北部に派遣されていました。その防人が停止になったのが天平2年です。その間、676年には新羅が朝鮮半島を統一し、連携していた唐と対抗するようになったので、唐が日本に侵攻する恐れが少なくなったからです。防人を統括する役所の大宰府で、梅を愛でながら平和の訪れを喜ぶ宴会が開かれたのでしょう。

当時の日本は国難を踏み台にして大化の改新を起こし、天智・天武天皇につながる律令国家づくりを目指します。明治維新が欧米列強の侵略に対抗して起きたのと似ています。ですから私は、古代にも近代化があったとしています。大化の改新以来の律令化がそれです。これは制度としては中国化で、中国的な法治国家に体制を変えることですが、そうすることで中国に呑み込まれない国になったのです。明治には、欧米列強をモデルに近代国民国家として立憲君主制の国づくりをしました。

神道の世界では、天武天皇の時代に伊勢神宮の式年遷宮や天皇の大嘗祭が始まっています。大嘗祭の形が整ったのは持統天皇からです。ですから単なる唐の模倣ではなく、律令制を正当化させる天皇制を同時並行で確立させています。

――元号も中国から取り入れたのですが、中国でも朝鮮でもなくなっています。

日本のアイデンティティーを確保するための文化なので、元号が1300年維持されているのです。グローバル化の時代にこそ文化的アイデンティティーが重要で、元号を守り続けるには大きな意味があります。

――近代天皇制も江戸時代末期に、光格天皇が長らく途絶えていた古式を復古したのが始まりです。

衰亡する幕府とは対照的に天皇の権威が急上昇したので、幕府と討幕派雄藩との間で孝明天皇の奪い合いが起こります。

――明治天皇は自ら立憲君主たらんとされ、憲法制定にも熱心でした。昼間は軍服の洋装でしたが、夜になると和装を好まれたそうです。

古い伝統を守っているから、最先端のグローバル化にも対応できるのです。そういう天皇なので、今200近い国の中で王政を保っているのは25～26で、権力を正当化する権威としてあり続けているのはイギリスなど数カ国です。連綿として皇位が継承されていることが、文化の一貫性を確保していると言えます。

今は国民に由来する権力ですが、議会制度にしても、行政・司法という社会的、世俗的な制度にしても、それらを神聖性を持ちながら根拠づけているのが天皇という存在です。ある意味で世俗を超えた連続性です。

今は憲法が天皇を規定していますが、本来は天皇の神聖性が憲法を正当化しているわけで、明治憲法は欽定憲法でした。戦後はGHQ（連合国軍総司令部）の指導もあって民主憲法になっていますが、憲法はあくまで世俗の法なので、神聖視するのは間違いです。憲法を守ることは大事ですが、不都合が生じれば改正するのが普通のあり方です。その点で、日本人は憲法の正当性の根拠は王制にあるという歴史的事実を見失っています。その上に揺るぎない王権があるからこそ、世俗法の憲法も時代の変化に柔軟に対応して改正できるのが、本来の日本という国のあり方です。

そのだ・みのる
昭和11年東京都生まれ。東京大学大学院宗教学博士課程修了。56年國學院大學文学部・同大学院教授を経て京都大学総合人間学部教授など歴任。宗教学や民俗学の視点から神道、日本宗教史を研究している。現在、秩父神社宮司、京都大学名誉教授。主著に『祭りの現象学』『神道―日本の民族宗教』『神道の世界』『誰でもの神道―宗教の日本的可能性』（以上、弘文堂）などがある。

現憲法では天皇は国民統合の象徴とされていますが、象徴とは見える世界を超えた存在を表現し、日本的王権の概念とつながっています。御代がわりの集約が大嘗祭ですから、できるだけ古式にのっとり、再現されることに大きな意味があります。

神社神道は宗教文化

――神道はどんな宗教ですか。

私は宗教のあり方には、文化としての宗教と教団としての宗教の二つのタイプがあると考えています。神道とりわけ神社神道の本質は宗教文化で、教団宗教ではありません。つまり、公共的な共同体の文化としての宗教であり、個人の信仰を問うことはしません。

全国の地域社会に、民の公共を守る神のあり方として、鎮守の森や氏子組織があり、古代国家もそれに支えられていました。近代的な政教分離の原則により規制されるものではないと思います。地域地域で神を祀る、公共性を持った宗教の在り方は、個人個人が信仰に基づいて形成する教団を阻害するものではありません。その宗教の二つのあり方がバランスよく成り立っているところが、日本社会に安定をもたらしています。個人の信仰に干渉することなく、家族や地域の健康、安寧を祈り、支えてきたのがお宮です。

戦前のいわゆる国家神道では、「強制」という要素を持ってしまいましたが、それは戦後に解消され、本来の神道のかたちに戻っています。地域に応じて、四季の移ろいや農作儀礼の祭りとして人々に継承されている文化としての宗教には、行政がかかわることも法的に認められています。

――明治以降、仏教は西欧の影響を受け、宗教を個人の内面のことに限るとして近代化してきます。

仏教も日本化していて、特徴的なのは仏性観です。「山川草木悉皆成仏」が宗派を超えて共通の自然観、仏性観になります。これは仏教の奥深い思想でありながら、すべての存在に命を認める日本人の生命観に見事に対応しています。ですから、地域の氏神信仰とも対立しません。

万物に命を認める日本人の感性に、深い霊性を与えてきたのが世界宗教である仏教で、その意味で仏教の受容は素晴らしいことでした。仏教は本来、家族を捨てる出家主義を唱えながら、日本では在家を大事にするようになり定着します。

個人の内面の問題だとしながら、先祖に対しては日本人本来の霊の祀り方を踏襲しています。それは、やはり共同体あっての祖霊信仰だからです。

――今注目されている縄文文化の特徴は命はめぐるという循環思想です。土偶の多くは妊婦がモデルで、夭折した子供の足型をとった粘土も発掘されています。

仏教でいう輪廻転生とは違うのですが、具体的な家族のなかでの命の継承が信じられていたようです。そうした生命観の上に仏教を受容したので、インドや中国にはない本覚思想が日本で生まれたのです。

――外国人の間にも神道への関心が高まっています。

初めは禅をはじめ日本仏教に注目したのですが、その奥に日本人の霊性観があることに気づいてきているようです。何より動植物と共に生きているというのが、欧米人には理解を超えています。

人間関係では、他者との関係を重要視するのが日本人の精神性です。ですから仏教でも大乗の利他行が広く受け入れられました。それに対して欧米では、まず自分があって他者があるという逆の発想です。

和辻哲郎の人間観は実存主義で一世を風靡したドイツの哲学者ハイデッガーの批判であり、極めて対照的です。ハイデッガーの思想は、まず個があり、個のあり方を追求するのですが、和辻は「純粋な個はあり得ない、他があって初めて自がある、間柄の存在が人の実存である」というとらえ方をしました。生まれながらに母親との関係から始まり、他者との対話によって自我が形成されるので、人間の成長過程からも、単一の個にこだわるのではなく、間柄から人間の実存をとらえるべきだと。他者との関係で自己を確立していくのは神との関係も同じです。そうした発想の違いが、いろいろな人間関係や社会関係の違いとなって表れています。社会的存在の人間であるから、共同体を自ずから尊重するようになるのです。西洋的発想からは、それでは自己がないのではないかと言われるのですが、そうではありません。

見える世界に生きながら、見えない世界とも対話して、つながり、関係を基本にして物事をとらえようとします。ですから、自分たちの命も他者とのつながりで考える。食物も動物や植物の命をもらうことなので、食前には「いただきます」と感謝します。

日本語では、自分の表現も他者との関係で、私、ぼく、我など多彩に変わります。関係性の中で自分をとらえているからです。ところが、英語ではIの一字しかありません。日本人にとっての他者は人間だけでなく、動植物や空気、環境も含まれ、それらの中で自分を位置づけようとします。それが本来の日本的な共同体のあり方で、常に周りの自然とのつながりで自分たちの存在をとらえていました。

それがいつの間にか非常に平準的な地域社会、都市、人間だけの集団だけの近代的なとらえ方に支配されてきています。共同体の強さを一貫して排除してきたのが近代化の過程です。普遍的、合理的な基準ですべての物事を処理するのが科学的合理主義ですが、全てを一元化するなかで、生の人間の生き方を支えている文化のレベルを軽率に扱ってきて、長い伝統で伝えられている文化をないがしろにし、どこにでも通じる、グローバリズムだけを重視するという間違いをしているのではないかと思います。

天皇の象徴性とは

――象徴としての務めを果たされる一環として、上皇陛下は天皇の時代、たびたび被災地を訪ね、被災者の人たちに同じ目線で慰めの言葉などおかけになりました。

天皇は日本国の文化や歴史、国民統合のアイデンティティーというお姿を超えたものをお持ちなので、そうした振る舞いに、人々も単なる1人の人格を超えて、日本全体を感じているのではないかと思います。ある意味では一種の世襲カリスマですね。

――そうした天皇の人格に触れた人は、周りの人たちにも同じように接したくなるという広がりが見られ、それが復興の力にもなっています。あるべき日本人の姿を体現しておられるように感じます。

令和の時代に戦争はないと思いますが、自然災害には見舞われるでしょうから、そんな折に天皇の振る舞いが被災者の人たちに力を与えると思います。不幸にして亡くなった人たちへの慰霊と、復興に立ち向かう人たちへの励ましですね。

――エドマンド・バークが言うように、民主主義は生きている人だけでなく亡くなった人たちにも支えられているものですから。

生命は個体の死で終わるものではなく、つながっているものです。命のつながりは親から子だけでなく動植物との間にもあります。そうしたものが生かされるのが文化で、大事にしていきたいと思います。

一世一元は国民を縛る思想だと言う人もいますが、人生を送る上で日本ならではの歴史のとらえ方があります。明治以降の時代を振り返っても、その時代ならではの歴史があり、国民にはそれぞれの天皇と同じ時代を歩んできた思い出が共有されています。平成の最初に生まれた人は既に30歳になっていますから。平成生まれの人たちがこれからの時代の中心になるので、どんなふうに自己形成し、社会を変えていくのか興味があります。1人の天皇の存在がそれぞれの時代を画するわけです。それをよしとしない人は、どこにでも通じる文明としての西暦を使えばよく、それに対して文化としての元号には、多少の不便はあっても、それを意識することが日本らしい歴史のとらえ方にもなります。

――昭和天皇は記憶の王で、印象深いのは、先の大戦の敗戦時に、側近が不安を訴えると、白村江の敗戦の後を考えればいいと言われ、戦後のいわゆる人間宣言では、明治天皇の五カ条の御誓文を引用され、日本にも民主主義の歴史があったことを示されました。

明治維新を市民革命だとする見方もありますが、形から見ると原点に立ち返ることで新しくなるというものでした。過去に全くなかったものを打ち出す革命ではありません。原点に戻ることで現体制の固陋を打ち破ることが、大きなエネルギーを生むのだと思います。明治維新が神武復古を唱えたのと同じように、大化の改新でも神武に戻れということが唱えられました。天武天皇の最初の大嘗祭では第10代の崇神天皇以前の時代に戻れとされています。そこから30代経っているので、崇神天皇でさえ既に神話的存在となっていたのです。神武から崇神までの本来の天皇のあり方に戻ろうとして大嘗祭が設定されたのだと思います。だからこそ、黒木造りの掘立柱で、古代天皇が神と同居された「同殿共床」を祭祀の形で再現して、名実ともに神と共にある天皇のあり方を体験されるものです。

上皇陛下は私より3歳年上なので、ほとんど同じ戦後の時代を生きて、皇太子というなじみはありましたが、果たして天皇という実感を持たせてくださるのか、自分の気持ちを見届けたことがあります。すると、天皇として腑に落ちたのは大嘗祭でした。映像でその一端を拝見しましたが、侍従や掌典らによると本当に真剣になされたそうです。「全身全霊で象徴を務めた」と言われる通りです。大嘗祭を終えられ、天皇だと直感的に認められました。同じように今秋、大嘗祭が厳かに執り行われると思います。政府も、天皇の私的行事だが国の大事な行事として公費で行うことになりましたので安心しました。

大嘗祭の施設は終わるとただちに取り壊されます。それが祭りで、そのとき以外に成り立たない、恒常化しないのが祭りなので、日常とは次元が異なります。海外では、例えばイギリス国王の即位式が英国教会で行われますが、規模や形式において類を見ないものです。今の時代に異次元の時空間における特異な行事で、だからこそ祭りの文化なのです。

祭りとまちづくり

――昔からの祭りが続いている地域社会は比較的しっかりしています。

3・11以降の東北の復興の中で、先日、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会による「東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式」が3月14日、宮城県岩沼市の千年希望の丘で行われ、私も祝詞を奏上しました。同地域の復興を8年間見てきて、一番印象的なのは、厳しい状況にもかかわらず、いち早くお盆や祭礼、郷土芸能が再現されていたことです。それによる心の癒やしが、復興にいかに効果的か目の当たりにしてきました。それらを糧にしながらコミュニティーが再建されることが、真の意味での復興につながります。災害からの復興にも文化が大きな力を持っているのです。文明的なハード面の復興も大事ですが、やはり精神的な復興には文化が不可欠で、それも借り物の文化では不可能で、そこに住む人たちの血肉になっている文化です。その意味では、東北に豊かな郷土文化や祭礼、慰霊のふるさと文化が強く残っていたのが幸いでした。

――ふるさとの山はありがたきかなで、郷土の風景は心の中に生きています。

秩父でも古来からの文化が近代化の中で解体され、文明的には少子高齢化で地方が疲弊し、コミュニティー文化が危機に瀕しています。その意味では、3・11後の東北が直面していた問題は、全国の問題を先取りしたものでもあります。地方が立ち直るには、地元の風土を破壊してきた企業などに求めるべきではなく、やはり地域が自力を発揮するしかありません。それは、地産地消やエネルギーの自給、エコ社会化などで自立性を高め、環境を豊かにしていく道です。それに向けた自発的なコミュニティーづくりが求められています。自発的な発想で、それぞれの地域の魅力を発揮し、観光客などの交流人口を増やしていくのです。そうした活動は環境省も応援しています。そこで私が提唱しているのは「グローカリティー」で、文明的なグローバリゼーションの中で、ローカリティーを高めることです。

――岡山県真庭市は木質バイオマス発電で電力の自給を図っています。

私たちが今取り組んでいるのは、石灰岩の採掘によって荒廃した武甲山の緑化です。古来から武甲山の湧水で稲作が行われ、地域の暮らしが成り立っていたのですが、近代の殖産興業でコンクリートの原料などとして大量の石灰岩が採掘されたので、山容が変わってしまいました。その失われた緑の回復です。秩父神社では神体山が武甲山であり、里と山とをつないできましたので、その関係を提唱し、神社も企業と協力しながら緑化に一役買いたいと思っています。それに向けて、関係者による「武甲山未来フォーラム」を開いていて環境省の担当者も参加しています。

ユネスコ無形文化遺産に登録された秩父夜祭は秩父神社の例祭で、祭りによるまちづくりも進めています。最終的には回遊型の祭礼博物館の開設を考えています。秩父まつり会館を拠点に分館を6つ設け、全国の祭りの情報を提供できるようにします。街中の空き家や空き地も活用できます。日本の祭礼を情報化した博物館は全国にもないので、関心を集めると思います。

埼玉・高麗神社

小林芙蓉氏が揮毫を奉納

すべての宗教は「光」

奉納した揮毫の前で挨拶する小林芙蓉氏＝4月15日、埼玉県日高市の高麗神社

埼玉県日高市の高麗神社（高麗文康宮司）で4月15日、参列者約110人が見守る中、書画家小林芙蓉氏の揮毫「光」が奉納された。最初に斎主の高麗宮司により揮毫奉納奉告祭が斎行され、次に石笛（いわぶえ）、鼓、舞が奉納された後、小林芙蓉氏が「光」の揮毫を奉納した。

太鼓が鳴り響き、修祓の儀。宮司が揮毫奉納奉告祭詞を奏上した。次に宮司、そして小林芙蓉氏が玉串を奉って拝礼して、揮毫奉納奉告祭は滞りなく修められた。続いて揮毫奉納式が行われ、書の奉納に先立ち、石笛（横澤和也）、鼓（大倉正之助）、舞（木村差代子）が奉納された。

小林芙蓉氏が登壇し、続いて参列者が息をのんで見つめる中、大きな筆を力強く持ちながら、「光」の揮毫を披露し、奉納した。

その後、小林氏は挨拶し、「今日は百済、新羅、高句麗の王様の子孫が集まった。細胞レベルでみれば皆一緒だから、喧嘩しないで仲良くするにはどうしたらいいか考えないといけない。神道も仏教もキリスト教もすべて『光』なので、『光』という文字を書いた」と揮毫の意味を説明した。

最後に高麗宮司が「一体感ある雰囲気のなかで祭りができるのもひとえに日頃の小林先生のご指導のたまものだと思う。『光』といえば当社の御祭神若光を思い、御祭神の御神徳を意識せざるを得ない。この武蔵野の地を開拓したのも若光と高句麗人で、彼らなしに現在のこの地の発展はなかった。皆さまに御神徳が行きわたることを祈る」と、御祭神・高麗王若光の御神徳について述べ、揮毫奉納式が終了した。

午後1時から直会となり、併せて小林芙蓉氏の誕生日祝いも盛大に行われた。小林芙蓉後援会会長は「芙蓉後援会の50人は皆小林先生に何らかの形で救われている。私も先生から愛をうけたおかげで神様を信じられるようになった。書画を通して先生の愛を世の中の皆さまに伝えたいという思いが後援会だ」と小林氏に対する感謝の気持ちを述べ、次のように続けた。

「韓国でMERS（中東呼吸器症候群）が流行している時、日韓親善で韓国に行った。世界各国からの大使に感謝状を渡す予定だったが、MERSのためほとんどが出席をキャンセルした。周りの人は先生に『命にかかわるから行かないほうがいい』と、渡韓を止めたが、先生は『こういう時に行かなくてどうするのか』と決意し、私たちも志願して同行した。先生は韓国に対する愛が深く、MERSは雨が降れば収まるからと雨乞いの祈りをした。すると乾燥していた韓国に雨が降り、韓国の人は『雨が降った』と喜んでいた。神に向かって真っすぐ生きる、私たち一人ひとりのために祈ってくださる先生のように私たちも生きられたら、きっと世界全体が良くなるだろう」と小林氏の円満な人格を讃えた。